

〔伊呂波字類抄動物加〕鹿カノセキ、麕カコ、麀カコ

〔八雲御抄三下〕鹿鹿をささ秋清抄きたちなくの万きなくとも万こよひはなかずい

ねにけらしもかたぬくしかと云は鹿のかたのほふをとりてえひするうらをするなり、又

占部とも云万丸あきはぎを鹿のつまとはいふ也さてはなのつまとはいふ、すがる異名也

はちをもすがると云といへども、以鹿爲正説、かせぎわひなき万しかのしがらみとは、

萩の中に入ほどもにむすば、れたる也山よひとよみ又山したとよみ但このとよみの言

歌合に被咲事なり、しろしか日本紀日本武尊信の山にて、ひるをなげかけ給しが也、伊勢

大輔云、さをしかはかならずちるさからねど、おほきならぬをばよむべし、

〔日本釋名中〕鹿鹿しろくして臭ある也、かのし、とは、かあしき肉也、

〔東雅十八〕鹿シカ舊事紀に、眞名鹿讀てマナカと云ふ、また眞牡鹿と見えしをば、古事記には、眞

男鹿としるしたり、眞名といひ、眞といふが如きは、美稱也と見えれば、古には牡鹿をばラシカ

と云ひしとぞ見えたる、カといひシカといふ、並に義不詳纂疏に、天斑駒といふものは、一説に鹿

をば眞名鹿、眞牡鹿などいひしに、亦呼て斑駒といふべき事とも思はれず、斑駒とい

ひしは別に其物ありぬべけれど、義既に隠れしかば異なる説もありしなるべし、

〔倭訓栞前編十一〕しか鹿をいふ、肉香の義にや、角の岐の數によりて聲を發す、よて四聲を限る

もの也と、山家の説也、角に十二の岐あるもの、南都正倉院の寶物たり、又楓の形したるもあり、軍

用にせし事多く見えたり、眼科には角を角石といふ略○中ともしの鹿は、鹿兒にて鳴ぬものなり

といへり、略○中史に多入鹿爲證前言といふ事見えて、叛意なきの旨を明せり、さをしかの八耳よ

り出たるにや、春日に鹿を神使といへるは、第一殿は鹿島神にて、神幸の時、鹿に乗たまふよし、古

記に見えたり、よて春日嚴島ともに鹿民家に多くて、犬の如し、略○中鹿を追者は山を見ずとは、淮

南子に逐獸者目不見大山と見ゆ、